[四季録原稿(21)]
ウミヘビとノロの島

かつてインターゼミで育った第二世代の研究者十数人が、法社会学的側面から沖縄を多角的に解明しようと、共同調査を組むことになった。沖縄大学の田里修さんが最初の見学地として、企画してくれたのが、久高島だった。この島は、沖縄本島の東の海上五キロにある周囲七・八キロの小さな島だが、沖縄神話によると、東方から国生み神が最初に上陸したという特別な島である。

久高島へは、安座真港から船が出ている。出港時刻を間違えて船に乗り遅れたので、待ち時間を利用して、近くにある齋場御嶽(セイファー・ウタキ)を訪れることになった。ここも霊的な場所で、かつては男子禁制だったそうだ。屹立する巨岩と巨岩の隙間に祈りの場がしつらえられていて、日本神話の天の岩戸を彷彿させる。齋場御嶽を見学できたのは、怪我の功名といえよう。

徳仁港から久高島に上陸し、地割(じわり)の遺構を見学した。かつて琉球王国では地割制度が中核的な土地制度として行われてきた。明治三二(一八九九)年〜三六(一九〇三)年の土地整理事業によって、解消されたが、若干の離島では遅くまでこの習慣が残った。ここ久高島は、地割を長く残しただけでなく、昭和六三(一九八八)年制定の「久高島土地憲章」のなかで、土地の総有制を明文化し、いまだに耕地の私有制が確立されていないというユニークな島なのである。「本土の割地制と沖縄地割制の比較」という研究テーマが頭をよぎる。

さらに進むと久高殿(ウドゥンミャー)とよばれる建物が出現し、その前は広場になっていた。沖縄の女性史研究者の大城道子さんから、この場所で十二年に一度イザイホーとよばれる神事が行われると説明を受ける。その横の小屋は、イラブーとよばれるウミヘビを薫製にする小屋だ。この島は、イラブーの産卵場所としても有名だ。イラブーは強壮剤として珍重され、高価に取り引きされるが、漁ができるのは女性しかも特定のノロの家に決まっているそうだ。ノロとは、霊力をもった神女のことだ。この島では、女性は全員霊能力があるとされ、尊重されている。ノロ制度は、厳然として生きているのだ。